
孤高の者

馬路キレ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤高の者

【著者名】

Z5665D

馬路キレナ

【あらすじ】

寒い冬の夜。どんでもいる、ある一匹の老いた孤高の野良猫のお話。

(前書き)

この物語はフィクションです。

実際に存在する団体名、役職名などは一切関係ありません。

描写に関してあえて端折つてる部分がありますが
そこは想像で保管してください。

静けさに包まれた住宅地の真ん中を、列車がガタン「ゴトン」と音を立てて走る。

我輩は冷たい電柱に横たわりながら、遠くから聞こえる人間の笑い声、

親子が喧々と騒ぎたてるような家族団欒の声、とても幸せそうだ。我輩は寒空の中、電柱は寒すぎると思い、ある場所に向かった。一階建てのボロい安アパートの近くにある、ダンボールの置かれている場所だ。

ボロアパートの中から人間の「寒い」「寒い」という声が聞こえる。何を言っているのだ、我輩よりも厚い毛皮をかぶり、我輩よりも毛深い帽子をかぶり、毛皮の中には温いカイロとかいうものをつけて、

彼等の部屋は入ったことはないが、我輩の仲間から聞くに『エアコン』とか、『ストーブ』とかいうものでまるで夏のような暖かさらしいじゃないか。

それを何が言うに事欠いて寒いだ！ まったく人間といつもの贅沢だな！

ダンボールの場所まで行くのには少し時間がかかった。

我輩が年老いてるせいもあるが、とにかく外が寒すぎた。

我輩の茶色と白色の手足はかじかみ、目の前は霞みがかって見えやしない。

道路は冷氣で冷たく、たまに出会う人間達の吐く息は白く、白く… うん？ 雪が降ってきたのか、どうりで寒いはずだ、まったく寒い。

目印となっている光を出す街頭のライトも今日ばかりは弱弱しく感じる。

そつか冬だ。冬が来たのか。
我輩の最も嫌いな冬が来たのだ。

ダンボール置き場まで向かうと先客が居た。
三丁目で幅を利かせているタマとか言つ奴だ。

「おいじこさん！タマさんの繩張りになんのようだー。」

「最近の若者は口の聞き方を知らんな。いつからここはお前さんが
たの繩張りになつたんぢや。我輩は五丁目の頭田、キャットイさん
の紹介でここをしきつている者だが…」

キャットイといつのは白黒のデカい体をもつ野良猫のボスみたいな
奴で

強さにおいて右の者なしといわれ、この町の頭田のような存在であ
つた。

我輩はそのキャットイに一田置かれた老猫であり、猫界の影響力も
強かつた。

「な、なんだジジイ！あのキャットイさん…び、ビリしますタ
マさん！」

「ケツ、キャットイだと？かまつめえ。おいじいさん、よく覚えて
おきな、この俺がここら一帯の次期ボスになるタマよ。今のうちこ
尻尾をふつておくんだな」

「お前さんが次期ボス？」

あたりをしきつているボス猫には逆らわるのが猫界の掟、

その撃を破ったかつたら力で破るのがボス猫としての資格である。
だがキャットティは子分たちの面倒見もよく、力においてはこうり
ーひるー

野良じもが五、六匹かかっても負けるはずはない。
最近はルールも守れない若い野良達が出てきて、まったく困ったも
んだ。

「若い時には無茶を盡つもんだ。今のは聞かなかつた事にしよう。
さあ、キャットティさんの耳に入らないつむじを退くんだお若い
の」

「だまれジジイ！」

そういうとタマは血相をかえて我輩に飛び掛ってきた。
我輩はこいつの時、ケンカをしない。

弱い自分の老体がいくら頑張つても若い肉体には負ける。
勝てないケンカをすることの無意味さを知つてゐるからだ。
ただ、逃げるのには余がない。

だから相手をジッと見つめて仁王立ちをする。
そうすることによって、相手に無言の抵抗をしかけるのだ。

簡単なことだ。

背筋をピンと立たせ岩のように動かない事と、
痛みに耐えるくらい強い意思さえあれば、なんのことではない。

よつは我慢比べだ。

だいたい勝手に相手が、うんともすんとも言わない我輩を
なぶるのに飽きてそこから居なくなつてしまつ。

「ケツー・ジジーのくせにでしゃばりやがつてーおまえら行くべーー！」

「へ、へ…」

終わったか。タマたちは捨て台詞を吐いてどこかへってしまった。若い者は力はあるが、大人の猫のように殺すほどの執拗さがたりないから、

痛めつけ方も半端で、残る痛みも瞬間的なものが多くて楽でいい。

いつもどおり、我慢比べに勝った我輩は、
わざわざまでタマが座つていて温さが残るダンボールへとヨロヨロと
おぼつかない足取りでよじ登り、乱れた毛の毛繕いと傷ついた傷口を
一生懸命なめました。

深くはない傷だが、ところどころ噛まれたり爪で切り裂かれたりして
やはり冬場に老体の体に鞭を打つて傷口をなめるのは意思がゆらぐ
ほど痛い。

ダンボール置き場の上には屋根がついており、雪をはねることもちょ
うどいい。

今晚はここで一夜を明かそう。

「今日も随分やられたね。大丈夫かい？」

なめている最中に聞いたような野良の声。

誰かと思つてみてみたら、ボス猫のキヤツティじゃないか。

「我輩は丈夫である。キヤツティむことかこの虚空の中ビ�したの
かね」

「いや、君が二十一回のタマの連中にせりあいでこいつを知らせてく

「若い者はすぐ暴力に走る。話をしようとしてもすぐこれだから困る」

「ははは、君の生き方は気高くて孤高だからね。きっと嫉妬を買つたんだわ。同じ猫としてそういうありたいと想つよ」

そういうとキャットさんはダンボールの上にのぼつてどこから持ってきたかわからないが、秋刀魚の肉と骨のついた人間たちの食べ残しを我輩に差し出した。

「こつもすまないねキャットさん」

「いやいいんだ。君のような存在がいてくれるから、この町内の猫達も立派に野良をやつていいんだよ」

「そういうわれると我輩も少し照れるな」

「隣、いいかい？」

「どうぞどうぞ、我輩も傷口の痛みに少々嫌気がさしていたところだ。話し相手がいたほうがいい」

ズムリ…平たく積まれたダンボールの上にキャットさんが乗るとやはり普通の野良よりも重たいらしく、ダンボールは沈んでいく。キャットさんは雪のふる空を見上げて、まるで「食べるよ」といわんばかりに秋刀魚を我輩に向けてくる。

「空が綺麗だからかな？人間達の食べ残しも豪勢だよ」

「我輩のように長年生きているとわかるが、今日は人間たちの特別な日のようだ」

「特別な日？」

「道端で聞いたが、どこかの偉い人間の誕生日らしい」

「偉い人の誕生日か… へえ、その人は何をやつたの？」

「ああ… そこまではわからないが、とにかく人間達はこの日になるけど」でも楽しそうに振舞うな

「人間達に幸せでも、僕達には幸せな日かな？」

「幸せだな」

「どうして？」

「我輩たちの食い扶持が豪華になる」

「そりゃいいや」

我輩はキャッティの持ってきた物には一切手をつけずにいた。

氣を使つているわけではない、最近歳のせいか食欲が余り無いのだ。キャッティはそれを知らずかまた「食べないの？」といわんばかりに我輩を見つめる。

我輩は「キャッティさんのが食べればいい」と一言言つて秋刀魚を彼

に差し出した。

キャッティはなんとなく気まずそうに秋刀魚をガツガツと食べた。
彼はお腹がすいていたのに、自分の分をわしおいて我輩に餌を持つ
てきたのか。

不思議なものだ。

この猫の世界に年功序列の捷は無いといつにい、
なぜ我輩のようなひ弱な老猫に、キャッティは口をかけてくれるの
だろうか。

野良として同胞がどんどん死ぬ中、生きていくのも大変なのに
キャッティは率先して我輩に施しを持つてくれる。

「どうしてキャッティさんは、我輩のような老猫に良くしてくれる
のだ？」

我輩は、ついにその不思議を質問にして彼に投げかけた。

「どうして？君のような孤高の者になりたいからや」

「孤高？」

キャッティは一度、我輩の顔を見るとキッと整った眉毛をひそめ
ピンチと張った白いヒゲを鼻を使いつてピクピクと動かし、
再び雪の降る空を見上げた。

「君は孤高だよ。初めて僕がこの町内に入つて君に会つた日の事は
覚えているかい？君は二丁目の野良にやられて傷だらけだったが、
誰に情けをかけられるでもなく、立派に堂々と歩いていた」

「あの頃は若かったし、ただ負けて悔しかつただけさ」

「それに君は人間から餌をもらわないね。多くの野良達が人間達の甘い餌に釣られて食べてしまつというのに、あくまで自分が探し出して持つてきた物だけを食べる」

「空腹で田の前に餌をぶらせられても気づかない愚か者さ」

「そして君は群れない。僕のように多くの野良達を統括することも、そして親しい友達も作らず、孤独に一人で、群れないで生きていらる。僕ならその孤高に耐えられないだろ?」

「年寄り猫にひつついても何の利益もない事を良く知つてゐるからく。キャッティさんのように人気もあつて強い野良にはなれないよ

キャッティは空を見上げながら首を横に振つた。

「僕は強くなんかないよ」

我輩はキャッティの言つてゐる意味がよくわからなかつた。

ただ野良に生きて、ただ野良に死ぬ。

それのどじが強いのだろうか。

我輩はキャッティと話す中、急に眠くなる自分の体に耐えられず思わず寝てしまった。

「おや、寝てしまったのかい。じゃあ僕も失礼するよ……」

寒い、寒い。

長い、長い。

そんな夜が明けた。

キーンと張り詰めたような朝がやつてくる。

うん？ おや？ これはどうしたことだ。

朝だというのにまったく寒くない。

不思議だ、昨日やられた痛みも抜けている。

それにどうしたことだ、体は飛ぶように軽いし、

心は若かつた頃を思い出すよつて弾んでいる。

そして、青々とした空に我輩は浮き上がっていく感じがした。
遠くに見える雲の切れ目の前でキャッティさんの声が聞こえた。

「最期まで孤高の者だったね……君は」

「コシ」と笑うキャッティさんの笑顔は何故だか悲しげで、
我輩はそれを遠くの空で見つめて、実に不思議な気分を味わっていた。

だが、寒空の下でぽつんと聞こえたキャッティさんの言葉と、
霜焼けたように赤くなつた彼の泣きはらした笑顔を見て、
我輩は孤高の者という言葉に何故だか恥ずかしいような、
むず痒いものと、心満ち足りるような暖かい物を感じながら、
陽光が射しぬける、雲の遠く、遠くへと飛んでいった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5665d/>

孤高の者

2010年10月9日13時14分発行